

大和物語の〈二人妻譚〉をめぐる考察

—百四十九段から「はいずみ」へ—

小山清文

『大和物語』百四十九段は、いわゆる〈二人妻〉の物語となっており、新しい通い妻の出現、本の妻との復縁、新妻への愛想尽かしと続き、『伊勢物語』二十三段の中盤以降とほぼ同じ物語内容となつてゐる。『大和物語』の百四十九段については、これまでのところ概して、過度・饒舌にしてくどいほどの説明や蛇足的叙述が目立つてゐるとか、ゴシップ的発想や世俗的関心が強いなどといったマイナスの評価がなされがちであつたように思われるが、それらはたして正当な評価といえるのだろうか。『伊勢物語』二十三段との比較を通して、新たな『大和物語』なりの表現世界の意義が見出されるのではないか。本稿では、ともすれば、ほぼ同内容の〈二人妻譚〉を語る『伊勢物語』の称揚に資するような位置付けを担わされてきた本章段について、『伊勢物語』二十三段との比較を通して見えてくる本段独自の視点や問題意識をめぐり解析していきたいと思う。

一 『大和物語』百四十九段と『伊勢物語』二十三段の比較考察から

まずは、『大和物語』百四十九段の全文を次に掲げておく。^①
〔B〕昔、大和の国、葛城の郡に住む男女ありけり。この女、顔かたちいと清らなり。年ごろ思ひかはして住むに、この女いとわろくなりければ、思ひわづらひて、限りなく思ひながら妻をまうけてけり。この今の妻は、富みたる女になむありける。ことに思はねど、行けばいみじういたはり、身の装束もいと清らにせさせけり。

かくにぎははしき所にならひて、来たれば、^②この女いとわろげにてあて、かくほかにありけど、さらに妬げにも見えなどあれば、^③いとあはれと思ひけり。心地には〈限りなく妬く心憂し〉と思ふを忍ぶるになむありける。^④とどまりなむと思ふ夜も、なほ「往ね」と言ひければ、^⑤わがかくありきするを妬まで、ことわざするにやあらむ。さるわざせ

ずは、恨むることもありなん）など心のうちに思ひけり。さて、出でて行くと思えて、前載の中に隠れて、（男や来る）と見れば、端に出で居て、月のいとみじうおもしろきに、頭かいけづりなどして居り。夜更くるまで寝ず、いといたううち嘆きてながめければ、（人待つなめり）と見るに、使ふ人の前なりけるに言ひける、

風吹けば 沖つ白浪 たつた山

夜半にや君が 独り越ゆらむ

と詠みければ、（わがうへを思ふなりけり）と思ふに、いとなしうなりぬ。この今の妻の家は龍田山越えていく道になむありける。かくて、なほ見居りければ、この女、うち泣きて臥して、金椀に水を入れて胸になむ握えたりける。（あやし、いかにするにかあらむ）とて、なほ見る。されば、この水熱湯にたぎりぬれば、湯ふてつ。また水を入れる。見るに、いとかなしくて、走り出でて、「いかなる心地し給へば、かくはし給ふぞ」と言ひて、かき抱きてなむ寝にける。かくて、ほかへもさらに行かで、つとみにけり。

〔C〕 かくて、月日多く経て、思ひけるやう、（つれなき顔なれど、女の思ふこと、いとみじきことなりけるを、かく行かぬをいかに思ふらむ）と思ひ出でて、ありし女のがり行きたりけり。久しく行かざりければ、つつましくて立てりけり。さてかいまめば、我にはよくて見えしかど、いとあやしきさまなる衣を着て、大櫛をつらぐしにさしかけて居りて、手づから飯盛りをりけり。（いとみじ）と思ひて、来にけるままに、

行かずなりにけり。

⑬ この男は王なりけり。

『伊勢物語』二十三段には冒頭部分に幼馴染同士の恋愛成就の話があり、その部分を仮に【A】、その後の新妻通いと本妻との復縁を【B】、新妻の後日談を【C】とするならば、『大和』の百四十九段は【A】を欠き、『伊勢』二十三段の【B】に相当するところから物語が始まり、また、『伊勢』の【C】の後半部を切り捨てた構成になっている。

まず初めに、『大和』百四十九段のほうに特有の傍線部④～⑥の箇所について注目してみたい。傍線部④は男の視点に基づいた叙述、傍線部⑤は和歌以外に本段内で明かされる本の妻の心情についての語り手による説明、傍線部⑥は男の心中思惟の一部である。近接する傍線部⑤と④⑥の間には女の妬み・妬ましさの感情の有無をめぐり明らかに相違が見出され、そのような齟齬を通して、本の妻の内面をいささかも読み取ることができずにいる男を露骨に形象化しようとする物語の思惑が感知されるだろう。さらにその先に読み取られるべきは、忍耐する女の完璧さの強調であるのか、それとも女の内面を見抜くことができずに誤解する男のありようであるのか。後世の『十訓抄』第八「諸事を堪忍すべき事」には本話が『大和』の百五十八段とともに採録されており、忍耐称揚の恰好な例話として位置付けているが、本来『大和』百四十九段自体はどちらを志向していたというべきか。

*

以下では、いささか迂遠となるが、『大和』百四十九段と『伊勢』二十三段の比較を通し、如上の問題に迫っていきたいと思う。

まず、『C』部の物語展開について、『伊勢』では「まれまれ、かの高安に来て見れば」というように、あつさり⁽²⁾と直前の歌徳を覆すようにして切り拓かれていく。『A』で幼い男女の絆の強化、『B』では夫婦仲崩壊の阻止と、男と本の妻を繋ぎ止めた和歌の効力がいかんなく發揮されるが、『C』では一転、たとえ物語展開上の都合であつたにしても、そしてまた、「まれまれ」との周到な断り書き的言辭があつたとしても、歌徳譚のまさしく直後にその無効が早々と語られるばかりか、その後の今の妻の詠歌にいたつては何の効果も顕さなくなる。そして歌徳から歌の不可能性へと主題が深まりゆく一方⁽⁴⁾で、それとは異なる新たなもう一つのテーマが俄かに迫り上がってくるようである。「かの高安に来て見れば、はじめこそ心にくもつくりけれ、今は打ち解けて」という傍線部からは、「はじめ」と「今」で変化した今の妻の振る舞いが俄かに問題視されてくる⁽⁵⁾ことが読み取れる。二重傍線部の「見れば」については、久方ぶりに来訪したであろう男を前に気を緩めるとはさすがに考えにくいゆえ垣間見と解すべきであるという見解もあるが、傍線部の「はじめ」と「今」を対比する文脈から推せば、やはり垣間見ではなく家中で対面している場面と読むべきところであろう。『伊勢』二十三段は、時を経て変化しただけの今の妻の姿・振る舞いを戒める一方で、時を経て変わらぬ心を

持ち続ける本の妻を称える対比構造により成つており、幼恋の経過を印象付ける設定が〈二人妻譚〉が繰り広げられる前に置かれる意義もそういう点から理解されよう。

一方、『大和』のほうの当該箇所は、傍線部⑩「さてかいまめば、我にはよくて見えしかど」とあり、「垣間見」であることが明示され、男と対面している時と男の不在時とで異なる姿態の今の妻が指弾されている。時の経過による変化ではなく、男の在時・不在時での相違が男により問題視されているのである。『大和』において『A』の部分⁽¹⁾を欠いている一因をこのあたりに求めることもできよう。

ところで、『大和』百四十九段の和歌の位置付けについてはどうおさえられるだろうか。『伊勢』二十三段の五首に対し、本段は「風吹けば」の一首のみであるばかりか、『伊勢』ではとりあえずは(直後の反転的展開があるにせよ)その和歌の効用がすぐさま發揮され男の心を揺り動かしたが、『大和』のほうはいくつかの注釈書等で酷評される金椀の熱湯のエピソードが歌の後に続き、男を呼び戻す原動力としての和歌の力が相対的に低下していることが読み取れる。そもそも本段では和歌が主題を担っていると言ひ難い。男を動かすのに『伊勢』では語られない傍線部⑨のエピソードが必要とされている。

ただし、この箇所については仰々しく沸き立つ熱湯ばかりが目ざれがちだが、見落としてならないのは太字で表したように女をひたすら見続ける男について繰り返し言及し強調する語り手の

眼差しであろう。このエピソードを通して象られているのは、歌に詠み込まれた内面が視覚化・外面化されるまで見続ける男（＝行動しない男）だとはいえないか。本段には傍線部⑨以外にも太字で示した「見る」「見ゆ」から明らかであるように男の視線により描出される女の姿が頻出しており、これは『伊勢』二十三段の「見る」三例に比して異様に多いといえよう。『大和』百四十九段は、「見る」を多用することにより、外見を重視する男像を強調しているのだと思われる。傍線部⑨の直後の「走り出でて」などに、和歌のみでは動じなかった男が眼前の光景に衝動を禁じ得なくなつたさまが明瞭に映し出されている。『伊勢』にはない本段冒頭近くの傍線部①「この女、顔かたちいと清らなり」も、外面＝見た目を重視する男の造型に関わるものと意味付けてみることもできるのではないか。更に、単に『古今集』九九四番歌の左注⁶を受けているだけかとおぼしき傍線部⑦の月の描写もそのあたりの問題と関係付けられようか。この後の龍田山越えする男を思う女の詠歌からしても、月のない夜とした方がより一層、諸注で指摘されているような物騒な山越えの無事を案ずる心境が効果的に表現されるにもかかわらず、なぜあえて月を配したのか。やはり男の視点に基づく行文であるので、月下に映し出される女という視覚的效果が考慮されている場面形成が図られたものと考えてみることもできようか。

次に、『大和』百四十九段の場合、【C】部への導入はどのようなか見えてみたい。傍線部⑩にあるように、男は【B】に語られた本の妻の平然とした外見上と激しい思いに燃える内面

の相違に想到し、そこから外面には表れない秘められた内面のあること、外観だけでは計り知れない女の内面、それゆえ見た目だけで判断できないということをしかと学び取り、「つれなき顔（＝外面）なれど、女の思ふこと（＝内面）、いとみじきことなりける」との認識を深める。そうして、訪れが絶えたままの新妻もさぞや熱い思いを滾らせているだろうと心を起こして再び出かけるといふように、『伊勢』の「まれまれ」に比して、より練られた設定となつているということができよう。

さて、訪れた先で女の姿態を目にした男の反応について注視したい。傍線部⑫の女の姿態を密かに垣間見た男は女に逢わずしてそのままその場を後にしたものと思われ、今度こそ新妻との完全な決別を心に決めたらしい。ここに、女のはしたなさやだらしなさゆえに、せつかくの男の来訪というチャンス⁷を台無しにしたしまった女の常日頃の身嗜みの怠りを難じ、忍耐或いは「つれなし」という態度の推奨に加え、油断の戒めをも説いた教訓譚として本話を読み取ることも可能であろう。或いはまた、かつて自分に対して見せていた女の姿を男が偽り・欺きと断じたのだと読むとすれば、真実でない物事はいずれ露見するのだという教訓ともなるだろうか。物語作者としての男性と物語享受者としての婦女子という当初の関係を考慮するならば、他愛のない娯楽具としての物語を通してそれとなく女の心得を体得させようと、物語にそうした役割の一端を担わせようとした男側のひそかな思惑を看取することもできようか。

しかしながら、例えば古注の『大和物語虚静抄』に「陪膳の女

は必櫛をさす事也(略)此女もその故実にて櫛をさして家子の陪膳をもせしにや⁽⁸⁾と指摘されるように、仮に、普段は家刀自のごとく家子の陪膳等に勤しんでいたが、男の来訪時は着飾って男の歡心を買おうと努めていたのだとするなら、そこには単なる欺きというよりは健気ささえ感じられようし、「いとみじ」という酷評の妥当性も微妙に揺らいでくるのではあるまいか。

更に、今の妻の描写で最も気になるのが、傍線部②の「いとあやしきまなる衣を着て」の部分である。「いとあやしきまなる」というからにはよほど貧相な身なりをしていたのだろうが、今の妻が「富みたる女」であつたのであれば、くつろいでいたにしても、なぜそんな姿をしていたのか理解に苦しむ。これに対応する箇所は『伊勢物語』には「手づから飯匙とりて、家子のうつはものにもりけるを見て」とあるだけで、これは『大和物語』独自の設定である。例によつて、『伊勢物語』の描写に尾鱗を付け過度にして饒舌な言い回しがなされただけのこと、或いは、本の妻の奥ゆかしいあり方との対比を鮮明に映し出すための筆の勢いによるものに過ぎぬもので、そのようなあら捜しを始めたら物語など読めなくなるといふ立場も当然あるものと思う。それにしても、見苦しい、みすばらしい姿というものは、身嗜みの怠りや油断だけがもたらす現象であるのか。油断・怠りゆえの姿態を写したものと直ちに断定し得るものなのか。本段のはじめの方の傍線部②に地の文で「この今の妻は、富みたる女になむありける。」と説明されているので、確かに当初は裕福に暮らしていたのであろうが、例えば、「行けばいみじういたはり、身の装束もいと清

らにせさせけり。」ともあるような男への献身的な後見による散財の結果が現在の今の妻の惨状を招いたというような可能性について考える余地はまったく残されていないのであろうか。また、「手づから飯盛り」というのも、給仕女がいればそのようにだらしなくくつろぎ振舞う隙など生じにくいであろう。単に召使や給仕女の不在を説くだけの現代の注釈書もあるが、貧しくなつた本の妻にも「使ふ人」がいるくらいであるから、「富みたる」にぎははしき所⁽⁹⁾であれば給仕女がいけないこと自体、考えにくいのではないか。裕福ゆえに身分的には自分よりもまさる男と結ばれた女が男に気に入られようと必死になつて尽くした結果が惨憺たる現状を招いたのではないかと推測したゆえんでもある。

さて、実のところは、くだんの今の妻の描写に常日頃のだらしなさを讀むべきか、窮乏したさまを看取すべきかは定かではない。というよりも、今の妻の置かれている状況の如何以上にここで注視しておきたいのが、女の様子を見るなり、例えば前述したような子細を考えることもなく女側の見逃しがたい欠点であると即断する男性像についてである。そもそも、外面だけでは計り知ることのできない内面があるという認識の下、今の妻を訪うたのであつたにもかかわらず、男はまたしても目に見えた外見のみで判断を下すばかりで、その背景に潜むやもしれぬなにがしかの女側の内心や内情(それがいかなるものかは不明であると言わざるを得ないし、考慮に値するものがあるかどうか不明ではあるのだが)についてしばし思いを巡らせようとする様子など聊かも感じさせない語り口なのである。本稿では、垣間見により男の在時・不在時での

相違をもつば問題視する男とは別に、このようにひそかに男のありようを問う本段の深層に潜む眼差しの方に目を向けたい。

【B】における本の妻の件を機に認識を改めたはずの男であつたが、【C】の場面から読み取れるのは、相変わらず外見のみで判断する、見ることに、見えたものに拘泥し続ける姿であつた。男が今の妻に愛想を尽かすことになつた傍線部⑫「いとあやしきさまなる衣を着て」と本段の初めのほうの本の妻について叙した傍線部⑬の相似的状况が本の妻の今後の不安定さを暗示させて本段が閉じめに向かうのも氣になる構成である。むしろ、それが意識されての結構と考えられなくもない。

*

これまで『大和物語』百四十九段を論じてきて明らかになつてきたのは、結局のところ、男の認識のあり方ということになるであらう。ここで、あらためて、本論の初めの方に示した問題提起、すなわち、傍線部④、⑥をめぐる、完璧なまでの忍耐妻の強調、妻の内面を察知できずに誤解する男の強調のいずれをより強く読み取るべきかという点に立ち戻ることにはしたい。ここまでの論旨からすれば、本論はおのずと後者の立場を取ることとなる。考えてみれば、「ことわざするにやあらむ」であるとか、本の妻の深々とした歎きを目にした「人待つなめり」との判断など、本段には男の誤認が繰り返し語り込まれていたのであつた。

そのように見直してみると、「風吹けば」の歌を聞き、傍線部⑧「わがうへを思ふなりけり」と男に断じられていたところも

果たして正しい理解であるのか、はなはだ疑わしくなってくる。

この部分は、諸注ではだいたいわが身を案じてくれていたのだと解しているようである（或いは、だれか他の待ち人を想っていたのだとはなく、わが身を愛し続けてくれていたのだ、とする解も可能であろうか）。だからこそ、多くの注釈書で直後の「いとかなしうなりぬ」に女を愛しく思う男の心情ばかりを読み取っているのである。この和歌以外に女の思いが表現されているのは、地の文の傍線部⑤の「一か所」限りなく「妬く心憂し」のみである。「心憂し」の部分を、わが身のなげなさ・憂鬱感で解するか、男に向ける不快感で解するかは、現代の注釈書等でも意見の分かれるところではあるが、「妬し」に男への妬ましさや恨めしさなどの感情が籠められることは明白であり、このことを踏まえたとき、和歌直後に記される傍線部⑧の男の解釈の妥当性も問われてしかるべきであらう。

これまでは、無条件に男の認識自体を疑うことなく、よつて、傍線部⑧から「風吹けば」の歌に籠められた意味合いを読み取られていたのではなかったか。当該歌は直訳すれば、「あの方は、きつと今頃、龍田山を、この夜中にたつた独りで越えているのでしようか。」などとなるのだが、かなり多くの注釈書では、（おそらく和歌の後に記される男の受け止め方を踏まえ）さらに男の身を案じ無事を祈る女の心情を補つて訳している。しかしながら、これまで確認してきた女側の心情に拠つてみるならば、傍線部⑤で読者に対して明かされていた妬ましさ・つらさのニュアンスをむしろこの詠歌のうちに聴き取るべきではあるまいか。しかしなが

ら、詠歌の後の泣き臥す女や熱湯が沸き滾るほどの痛ましい心も、男にとつてはすべて女の自分への昂ぶる思いの感動的な表象として受け取られていると読めるだろう。そこに浮かび上がるのは、女の内面を捉え損ね、自己満足に浸る男であり、すれ違えばかりの男女のありようであるといえよう。

このように、『大和物語』百四十九段における男の認識のあり方が問題視され、その妥当性の危うさが際立ってくるのが何を意味するのか。仮に、『二人妻譚』の基本型を、本の妻・今の妻の二人の女をめくり、最終的にその優劣判定を下す男を基軸にして繰り広げられてゆく物語であると規定してみるならば、判定役を担う男が絶対的な信頼の揺るがぬ存在として位置付けられていることこそが物語上の必須の大前提となるだろうが、本稿で考察してきたような男の認識の確かさの大いなる揺らぎは、男を相対化し、ひいては『二人妻』の物語自体をも根底から揺さぶり返す極めて重大な事態であることが理解されよう。本段テキストには、忍耐を求められ、或いは素行を問われる女方とは対照的に、批評の対象から外れ無傷のままに判定を下すばかりの『二人妻譚』の男のありようについての裁断・指弾を受け入れるかのような物語解釈上の余地がひそかに内包されていると意義付けられるのである。

ちなみに、以上の読みはあくまでも傍線部④⑤⑥などを有する『大和物語』に限った解釈であり、『伊勢物語』のほうに取えて同様の読みを施すには無理がある。その点を十分に了解したうえで、「見ること」及び「見えたもの」を通じた判断がいかに危う

く不確かなものであるのかといった物語の前提への問いかけや、教訓譚の裏側に透視される〈見る男〉〈見られる女〉の固定的関係性の不均衡な側面（例えば、見る男の問題性、見られる（≡見落とされる）一方の女の悲哀等）など、『伊勢』二十三段のような『二人妻譚』の奥底に潜むかもしれぬ問題性を『大和物語』なりに看取し炙り出して見せたところに、百四十九段の深遠なる対『伊勢』意識を読み取っておきたいと思うのである。

『大和』百四十九段の考察の最後に、傍線部⑬「この男は王なりけり。」についても言及しておく。この「おほきみ」については、単に業平をほめかすものとして済ませるものほかでは、皇族出身の高貴な出自の男として二人妻の優劣裁断適格者として保証するものとする解が目を引く⁽¹¹⁾。後者は、女を見分け得る本来の素性の良さ（卓越性）の強調、審判としての資格の保証と意味付けようとするものだろうが、本稿の趣旨からは首肯しがたい。むしろ、貧相な暮らしに耐えられぬ、或いはその内面・内情等にも十分に思い至ることができずにいる、皇族出身ではあるものの聊か中途半端なお坊ちやまという揶揄的ニュアンスを暗に含んだ一文として読むことができないだろうか⁽¹²⁾。

なお、本段を隣接する章段とともに眺めてみると、いわゆる蘆刈譚の百四十八段・百四十九段と『伊勢』二十三段・二十四段は順序は逆転しているものの、一男二女型の『二人妻譚』と二男一女型の類似する物語が並べて語られる対構造となっていることがわかる。その場合、百四十八段の蘆刈男は『伊勢』二十四段の無傷な男とは大幅に異なり、ひどく無様な姿を晒しており、『伊勢』

に比して『大和』は男に対して憚ることなく手厳しい眼差しを向ける傾向を有していることが確認されるだろう。

二 『大和物語』の〈二人妻譚〉

ここからは『大和物語』における百四十九段以外の〈二人妻譚〉にも目を向けておきたい。

百五十七段は下野国に住む夫婦と「まかぢ」という使いの童をめぐる話、百五十八段は大和国に住む夫婦の鹿の鳴き声をめぐる話である。両話とも百四十九段の傍線部⑤に相当する本の妻の「心」憂し」という内心と、それを口に出さずに忍耐するさま(百五十七段「心憂しと思へど、なほまかせて見けり。」百五十八段「いと憂しと思へど、さらに言ひも妬まず」)が描き出されている。結末部の夫婦仲の復活は女が詠んだ和歌に感じ入ったことによるいわゆる歌徳によるもので、その後百四十九段などのように再び今の妻を訪うという展開も設けられてはいない。一見したところ、なんの問題もなさそうではあるが、男が感激しているのは和歌における掛詞や縁語などの上手い詠みぶりであり、修辞の裏側に籠められた女の心の訴えが男に届いているとは読みがたい。百五十八段では「限りなくめでて」と咄嗟の詠歌に感心するばかりの男が印象付けられているし、百五十七段の「物かきふるひ去にし男なむ、しかながら運び返して」という男については、百四十九段で沸き滾る熱湯を見て女の前に走り出た男に通じるような衝動的な軽ささえ窺えるであろう。¹³⁾

また、百四十九段は【C】の後半部を欠くため『伊勢』二十三

段に比し今の妻の存在感が薄められてしまっている(前述のように男は女に逢わずに退散したものと読み取られ、今の妻に何の弁解の余地すら与えられず見限られてしまふ)が、百五十七段と百五十八段にいたっては今の妻は設定上その存在が記されているだけであり、百四十九段に増して今の妻の存在感が希薄化している。百五十八段を読むかぎりでは、今の妻は何の咎もないにもかかわらず送り返されてしまうのである。百六十七段は結末は語られていないが、本の妻の掛詞を駆使した和歌からすれば男の翻意が容易に察せられるだろう。いずれにしても、四章段ともに本の妻の和歌だけを掲げ、今の妻の口が封じられている。一見すると、本の妻のヒロイン性を際立たせるべく、今の妻を物語の背後に押し遣っているようにも思われるが、百四十九段における傍線部③と⑫からは二人の妻に対比ばかりではなく重なりをも見出そうとする『大和物語』の眼差しが感知されもしよう。『大和物語』は決して今の妻を軽視しているわけではなく、『伊勢物語』の高官の女の造型にヒントを得て、これという男に対する明確な過ちを犯したわけでもないのに一方的に何の抗弁も許されぬまま退場を余儀無くされる今の妻の不条理窮まりない悲哀を、その希薄すぎる存在を通して映し出そうとしているものと意味付けられないだろうか。

ここで、一男二女の三角関係の物語で他の〈二人妻譚〉とは趣を異にする六十四段の平中の話を取り上げてみたい。この話は本の妻が忍耐をせずに、それどころか今の妻を追い出し、本の妻ならぬ今の妻の和歌だけ載せる異色な物語である。平中は本の妻の激しく厳しい言動に委縮するばかりで、このような事態を想定

していたならば、もとより女を本妻のもとに連れて来ることなどなかったのではないか。本の妻はおそらく日頃は平中の好色ぶりにいじらしく耐え続けており、この段の顛末は平中にとつてはまったくの予想外の出来事だったと読めるのではないか。本段の本妻は〈二人妻譚〉のそれとはイメージを異にし、〈後妻嫉妬〉の流れを汲むもののようにも思われるが、百五十八段の忍耐妻を變貌させて夫に一矢報いさせたものと意味付けてみることもできるのではないだろうか。さらに、段末に追い出された女から寄越されてきた歌「忘らるな忘れやしぬる春霞 今朝立ちながら契りつること」はどのように解するべきであろうか。どちらかといえば、平中に対する強い思いを表明するものとする解釈が多いようだが、いかがなものか。「忘れて消息したまへ。おのれもさなむ思ふ」という、今朝の別れ際に男が述べたばかりのことを、改めて「忘らるな」と念押しし、「立ちながら」と、本妻の劍幕に怖気づいて、近くに寄り添い優しく慰めの言葉を掛けてくれるどころか、屏風の傍らに突つ立ったままであったことをあげつらうかのような物言いにはむしろ（平中を想い信頼していたからこそ）平中への失望や皮肉・愛想尽かしのごとく響きが籠められているものと聴き取るべきではあるまいか。「忘れやしぬる」には、「あの約束を私も決して忘れません」というよりは、「今朝述べられたばかりの約束事をあなたはもう忘れてしまいましたか」という当てこすりに近い意味合いを読み取りたいと思う。

このように六十四段には、あえて好色家の平中を男に配し、日常化した夫の冷たい仕打ち・浮気への忍耐を絶えず余儀無くされ

ていた妻に逆襲・反撃を試みさせ、それがきっかけとなり新妻からも愛想尽かしを喰らってしまうという、通常の〈二人妻譚〉からの大いなる逸脱が語られているのである。それは単に奇を衒った筋書きというものではないだろう。通常は物語上は退却させられ無視されるままの運命に理不尽にも甘んじている今の妻の声をも掬い取り、スポットを当てたところに本段の意義が認められるのである。

尚、「古本説話集」所収の「平中事」には、前半に『大和』六十四段との同話、後半にいわゆる墨塗譚が載せられ、本の妻の反撃とおそらくは今の妻からの愛想尽かしが前半とは趣向を変えて語り加えられ、妻たちの逆襲が拡大していく様子が窺い知れる。

かくして、『大和物語』六十四段は、男の一時の感情・情動により振り回され翻弄されてきた二人の妻がはからずして男の意に背くことになり、本の妻⇨優良、今の妻⇨劣悪という画一的構図が突き崩されているのである。この点で想起されるのが百四十一段の「よしいゑといひける宰相のはらから、大和の掾」の話である。本妻のもとに筑紫の女を連れて来て据えていたが、この二人の妻は、仲睦まじく語り合う仲となり、男の愛を奪い合うというような対立的な関係に設定されてはいない。また、男の不在の間は筑紫の女が密かに別の男と通じてしまったり、その後もさらに新たな男と恋に落ちるなど、本段が冒頭から「本の妻」「今の妻」という語を用いて〈二人妻譚〉であることを十分ににおわせて語り始められたにもかかわらず、独自の展開を辿っていく。「よしいゑといひける宰相のはらから、大和の掾」の与り知らぬ

ところで筑紫の女が浮気をしてしまうのが斬新な展開として目を引くが、和歌に着目し今の妻たる筑紫の女を主軸に据えて読み直せば、三人もの男との恋に翻弄される女の胸中が本段全四首の和歌を通して映し出されているといえよう。

以上、『大和物語』における〈二人妻譚〉を眺めてみたが、『大和物語』は『伊勢物語』二十三段の二人の妻の物語に潜む問題性を意識しつつ、ほぼ同話とおぼしき百四十九段やその他の二人妻の物語を、作り替えや設定上のずらしや問い直し等を通じて様々に派生させていったものと思われる。なお、『伊勢』二十三段には「もとの女(妻)」という語はあるが、「今の妻」という語は用いられていない。『伊勢』には用いられていなかった「今の妻」という語の方を多く使用するところに、「本の妻」のみならず「今の妻」も同等に注視しようとする『大和』の眼差しを感じすることもできようか。そして、『大和物語』の影響を受け、『今昔物語集』にも卷三十の十、十一、十二話などの類話が収められているし、『源氏物語』の一部などにも〈二人妻〉の要素を探り出すことができる。『堤中納言物語』中の「このついで」の中の第一話目や「はいずみ」も当然これらの影響下に位置するものである。こうして見ると、ほかならぬ『大和物語』こそが『伊勢物語』二十三段へのひそかな異議申し立てを様々に施しつつ、結果的に多様な〈二人妻譚〉の形成に大きく関与したのであるとあらためて認められるのである。

三 『大和物語』百四十九段から『堤中納言物語』「はいずみ」へ

次に、『大和物語』以後の〈二人妻譚〉について、『源氏物語』と『堤中納言物語』の「はいずみ」に注目し少々考察したい。

『源氏物語』は人間関係が複雑に張り巡らされているので、男、本の妻、今の妻の三者のみによる物語展開は見られないが、たとえば、真木柱巻の鬚黒大将・北の方・玉鬘や、夕霧巻の夕霧・雲居の雁・落葉の宮らによる物語は〈二人妻譚〉を下敷きにして位置付けてみることもできるであろう。真木柱巻の鬚黒をめぐる二人妻の物語は、本妻に忍耐と嫉妬の両面が描かれ、最終的に本妻が親元の式部卿宮邸へと退去し、本の妻の敗退に終わる。夕霧巻の夕霧をめぐる二人妻の物語は、本妻たる雲居の雁にやはり忍耐と嫉妬の両面が見られ、雲居の雁が一時的に親元の致仕大臣邸へと退去する。さらに巻末近くにはもう一人の愛人の藤典侍が登場し、藤典侍と雲居の雁とによる和歌のやり取りを通して両者間に奇妙な心の交流が芽生えようとしている。夕霧の場合は、二組の二人妻の構図を映し出すとともに、複雑な妻妾同士の関係も点描するのである。最終的には匂宮巻の後日譚で、月の半分ずつを雲居の雁と落葉の宮で通い分けたというように語り収められ、『源氏物語』ではもはや本の妻の勝利という単純な型にはまった結末は崩されている。なお、指摘されているように、夕霧と雲居の雁の物語は物語当初の少女巻における初恋のあたりから『伊勢物語』二十三段を踏まえ語られており、結婚成就後の〈二人妻〉的物語

では、『伊勢物語』と夕霧物語で風流妻と実務型の妻の逆転現象が見られることも既に論じられているところである。⁽¹⁵⁾鬚黒と夕霧をめぐる(二人妻)の物語では、男女間の愛情問題のみが語られるのではなく、それぞれの家庭までもが波及的に崩壊してゆく事態とともに描き取られ、複雑な人間関係の中で繰り広げられる『源氏物語』ならではの独自の成り行きによる深まりを見せていく。

また、若菜巻に展開される光源氏・紫の上・女三の宮をめぐる物語も、多妻空間の六条院を舞台としているため、単なる三者の関係性のみでは済まない問題が多く横たわる。(二人妻譚)では概して本の妻の嫉妬を露わに表出しな態度が美德として称揚されがちで、若菜巻にも平然として動じない態度を貫こうとする紫の上に「つれなし」という言葉が用いられるが、女三の宮の出現によって決して心穏やかな情況ではいられないにもかかわらず、決してそれを周囲に勘付かれぬよう、その内心を強いて押し隠して演じ切るといったニュアンスが色濃く、「つれなし」の美德ではなくその裏側にこもる苦悩のほうに目が向けられていく。

以上、『源氏物語』では『大和物語』で試みられた(二人妻譚)への多様な問いかけが更に複雑な人間関係の中で深められているといえるだろう。⁽¹⁶⁾

*

最後に、『堤中納言物語』の「はいずみ」について取り上げておく。

「はいずみ」は、(1)男の浮気に哀しみを押し隠し忍耐する本の妻、(2)本の妻のあわれな様子や歌に心動かされ翻意する男、(3)掃墨をめぐる今の妻の大失態というように物語が進行していく。注目すべきは、やはり題名にもなっている(3)の部分であろう。いったんは本の妻に帰した男が再び今の妻を訪うことになる、『伊勢』二十三段や『大和』百四十九段で【C】とした部分への導入は「はいずみ」ではどうなされたのか。

この部分は、本妻が「夢のやうにうれしと思」った直後に、一転して「この男、いとひききりなりける心にて、「あからさまに」とて、今の人のもとに」と語られ、⁽¹⁷⁾男の「いとひききりなりける心」がこの急展開を可能ならしめている。「ひききり」とは、物事にいらだつさま、せっかちなさま、ゆとりのないさま、性急に決着をつけたがる性格などを意味するマイナスの語感を伴うことばである。物語上、安定する本妻の今後を強調すべく、(3)を語り加えるためだけであるならば行き過ぎの感があり、他の設定も十分にあり得たのではあるまいか。やはり、ここで男の軽薄な一面を刻印してしまうような「いとひききりなりける心」についてふれるにはそれなりの意図があると考えるべきであろう。ふと今の人のことを思うや、夕刻を待てずに俄かに訪ねるといふことさえしなければ、おそらく今の妻の失態は防げたものとも思われ、女側の油断とともに或いはそれ以上に男のひききりさこそが事の要因と位置付けられているのだとも言えよう。この男の「いとひききりなりける心」はこればかりでなく、女の真つ黒になつた顔に恐れおののき事の真相を見極めずに早々と退散したこと

や、そもそも新妻の親に娘の引き取りを即座に確約してしまう点、大原へと去っていった本妻の詠んだ「涙川」の和歌を童から聞くなり連れ戻しに出で立つところ、大原の粗末なあばら家を目にし直ちに連れ戻すところ、そして、今の妻にはとりあえず迎える日を延期する旨を告げてその場しのぎをするなど、物語の主要な局面ごとに影響を与えていたと読み返すことができるのである。本物語は、すべては男の「ひききり」が引き起こしたことになるのだと、その軽率さを断罪し冷笑しようとしているのではないか。そうなると、「ひききりなりける心」の男が二人妻の冷静な比較判定役としては失格であることは明瞭であろう。このように見てくると、「はいずみ」の男を、認識のあり方が不安視・疑問視された『大和』百四十九段の男の系譜上に位置付けてみることでできるだろう。「はいずみ」は、二人妻譚の男を公正なはずの判者から「ひききり」な軽率者へと据え直し、男に潜む問題をより露骨に先鋭的に浮かび上がらせたのであった。⁽¹⁸⁾ 繰り返しめくが、そうした眼差しの萌芽としての『大和物語』百四十九段の文学史上の意義が改めて反芻されるのである。

ところで、「はいずみ」では二人妻譚の男たちに潜む問題が「ひききり」という一語に集約されたが、この語が選び取られたのには何か意味があるのだろうか。実は、この語はあまり使用されることがなく、この作品以外では、わずかに『源氏物語』に三例、『夜の寝覚』に一例を見出せる程度である。

〔源氏Ⅰ〕真木柱卷③三七六頁

大将の君(鬚黒)、(北の方が実家に)かく渡りたまひにけるを

聞きて、いとあやしう、若々しき仲らひのやうに、ふすべ顔にてもものしたまひけるかな、正身(北の方自身)は、しか引ききりに際々しき心もなきものを、宮(父宮)のかく軽々しうおはする、と思ひて、……

〔源氏Ⅱ〕夕霧卷④四八三頁

大将殿(夕霧)も(妻雲居の雁が実家に帰ったことを)聞きたまひて、さればよ、いと急にもものしたまふ本性なり、この大殿(雲居の雁の父大臣)も、はた、おとなおとなしうのどめたるところさすがになく、いとひききりに、はなやいたまへる人々(父娘)にて、……

〔源氏Ⅲ〕夕霧卷④四八六頁

大殿(雲居の雁の父大臣)、かかることを聞きたまひて、……
「しはしは(雲居の雁が夕霧の浮気を)さても見たまはで(軽々しいことです)。……女(雲居の雁)のかくひききりなるも、かへりては軽くおぼゆるわざなり。……」

〔寝覚〕卷四 三九九頁⁽¹⁹⁾

(男君は寝覚の上の生霊の件を)深くまこととおぼすなめり。
いかでかは、さりとて、(男君は)名残なくひききりなる御心遣ひのあらむ。……

〔源氏Ⅰ〕の例は、鬚黒が玉鬘の件により北の方(本妻)が無断で親元に移ったことを知り、心中で北の方の父宮を暗に「ひききり」な人物として非難する場面である。〔源氏Ⅱ〕の例は、夕霧が落葉の宮とのことが原因で雲居の雁(本妻)がやはり無断で親元に移ったことを知り、事情もよくわからぬままに父と娘の

双方を難ずるところ、「源氏Ⅲ」は、その後雲居の雁の男親が娘の取った行為について難じる発言の一部である。三例ともに前に論じた〈二人妻譚〉の要素を帯びた展開のところで用例であり、しおらしく忍従することなく嫉妬心を露わにし夫に黙って勝手に突然親元に帰ってしまう本妻(側)に対し男性から向けられた軽率との誇りであることが確認できる。「寢覚」の例は、寢覚の上の心中思惟で男君の「ひききり」な心を否定する文脈で用いられているものであり、要するに、「ひききり」と認定されている人物は『源氏物語』における本の妻側の三名のみとなる。

これらを確認したうえで、あらためて「はいずみ」における用例を見てみると、そこに籠められた意識がより鮮明に理解できるだろう。『堤中納言物語』の中の一編「はいずみ」は、『源氏』の世界において繰り返し本の妻側の苦衷を深くも顧みずに一方的に「ひききり」という汚名を負わせ刻印してきた男、そしてまた、〈二人妻譚〉において揺るがぬ不動の絶対的地位を保証されてきたかのような男に向けて、この辛辣な評言を突き返していくのである。そういう点に、『大和物語』百四十九段の正統の後裔としての「はいずみ」の意義を見定めたいと思う。

以上、『大和物語』百四十九段は、男の認識のあり方を問題視することで、〈二人妻譚〉における大前提に潜む盲点を密かに暴こうとする可能性を秘めたところに意欲的な問題意識を探り読むことができるのであり、『堤中納言物語』の中の一編「はいずみ」も単なる〈二人妻譚〉のパロディにとどまるものではなく、同様の問題意識を受け継ぎ、笑いの矛先は男にまで及び、その後継的

作品として文学史上に位置付けられるのである。

注(1) 以下、『大和物語』の本文は前田家尊経閣本(為家本)に拠っているが、表記等は適宜私に改めた。

(2) 以下、『伊勢物語』の本文は学習院大学蔵伝定家筆本に拠ったが、表記等は適宜私に改めた。

(3) 「まれまれ」について、『伊勢物語』二十三段の注釈等では、「たまたま」「たまに」「時たま」などと注されているものもあるが、「こく稀に」という訳がここでは最も適切であろう。

(4) 下鳥朝代「はいずみ」論——『伊勢物語』二十三段をめぐる——(王朝物語研究会編『論集 源氏物語とその前後5』新典社、一九九四)、奥村英司「物語の古代学——内在する文学史——」(風間書房、二〇〇四)の第五章「伊勢物語」二十三段——和歌の力を超えて——など参照。

(5) たとえば、吉海直人『垣間見』の源氏物語 紫式部の手法を解析する(笠間書院、二〇〇八)など。

(6) 『古今集』九九四 左注の当該部は、「月のおもしろかりける夜かふちへいくまねにてせんさいのなかくれて見ければ」(本文は新編国歌大観に拠る)とあり、月の描写の後に男の垣間見について記されるが、『大和』では月の描写の直前に男の垣間見が設定されている。

(7) 『大和物語拾穂抄』の「やまとの女のみる人なきにかたちつくる」とこの女の人みぬ時にうちとけたると其心ばせいしかかりのたがひそやこのゆへに君子は屋漏にもはずすとやいへり世の人の心すべき所成けり(雨海博洋編著『大和物語諸注集成』桜楓社、一九八三)など。

(8) 雨海博洋編著『大和物語諸注集成』(桜楓社、一九八三)

(9) 松島毅『伊勢物語』から『蜻蛉日記』へ——「筒井筒」章段を手がかりとして——(石原昭平編『日記文学新論』勉誠出版、二

〇〇四)に、今の妻の裕福を疑う指摘がなされており興味深い。

(10) 森本茂『大和物語全集』(大学堂書店、一九九三)や今井源衛『大和物語評釈』(笠間書院、一九九九～二〇〇〇)など。

(11) 注(4)の下鳥論。他に、柿本奨『大和物語の注釈と研究』(武蔵野書院、一九八一)は、王であったから人を見る目を誤らず、妥当な判断が可能であったと意味付けている。

(12) 『源氏物語』蜚巻に「帥親王よくものしたまふめれど、けはひ劣りて、大君けしきにぞものしたまひける」(③二〇八、本文は新編日本古典文学全集に拠る。以下も同じ)とある例は、「おほきみ」を親王宣下も賜姓もない諸王程度の品格の劣る者としてマイナスのニュアンスをきかせた類似的用例として注目される。

(13) 伊藤一男『鄙の雅』『大和物語』第二五七段——「旭川国文」第二〇号、二〇〇六・三)は、男の行為を大仰に戯画化し揶揄する物語のありようを読み取るもので興味深い。

(14) 今井源衛『大和物語評釈』(笠間書院、一九九九～二〇〇〇)が本稿とほぼ同様の解釈をしている。

(15) 阿部好臣「夕霧の恋——システム破壊の視座」(『物語文学組成論

I——源氏物語』笠間書院、二〇一)

(16) 他に、『源氏物語』において(二人妻譚)の視点から考察した拙稿に、「源氏物語における〈雨夜の品定め〉の意義」(藤女子大学国文学雑誌)七十四号、二〇〇六・三)の二節や、「六条院・三条宮物語における〈継子・二人妻譚〉と〈平中〉引用——雲居の雁・玉鬘をめぐる——」(藤女子大学国文学雑誌)八十号、二〇〇九・三)の三節などがある。

(17) 『堤中納言物語』の本文は新編日本古典文学全集(小学館)に拠る。
(18) 注(4)の下鳥論や、竹村信治『言述論——G』説話集論』(笠間書院、二〇〇三)の中のA『堤中納言物語』論a『はいずみ』考などに、本の妻の物語の相対化や場当たり的な男の愚かさの暴露・戯画化、そんな男に生をゆだねる女たちの哀しみやはかなさ等に関する数々の興味深い指摘がなされているが、既に『大和物語』百四十九段などにそうした視点の萌芽が隠微ながら感知できると思われるのである。

(19) 『夜の寝覚』の本文は新編日本古典文学全集(小学館)に拠る。

新刊紹介

田中善信著

『元禄名家句集略注』

山口素堂篇』

本書は昭和二十九年刊行の荻野清編『元禄名家句集』(創元社刊)の注釈書である。

『元禄名家句集』とは、伊藤信徳篇・山口

素堂篇・小西来山篇・池西言水篇・椎本才磨篇・上島鬼貫篇の六篇で構成された句集。

最近まで来山以外のほとんどの発句に注釈がない状態であった。他の五篇に注釈を行ったのは本書のシリーズが初であり、元禄俳諧の研究では重要な取り組みとなっている。現在「山口素堂篇」でシリーズ三冊目。

山口素堂は「目には青葉山郭公はつ鱈」の句でも知られ、アマチュアの俳人であり

ながらその知名度は俳壇にて一目を置かれるほどであった。注釈では、全一九一句ある発句の詳細を簡潔にまとめている。

残りの三冊は佐藤勝明氏と玉城司氏とともに分担執筆を行っているらしい。全注釈の完成によって、元禄俳諧の研究がさらに発展することを願うばかりである。

(二〇一七年三月 新典社 A5判 一九七頁 本体一八〇〇円) [柳昭太郎]